



学校だより

平成29年1月31日
練馬区立田柄第二小学校
校長 谷田 弘子

HP <http://www.tagara2-e.nerima-kyo.ed.jp> e-mail info@tagara2-e.nerima-kyo.ed.jp

教育目標:元気な子ども・考える子ども・思いやる子ども

No.464

判断と体験

副校長 横尾 康幸

先日、「平成28年度 練馬区小学校PTA家庭教育振興大会」に参加してまいりました。

前半は、東京学芸大学附属大泉小学校、豊玉第二小学校、北町西小学校の3校からPTA活動の取組が紹介されました。後半は、講師の先生をお呼びしての講演でした。

講演は、東京都立西高等学校長の宮本久也先生が、「新しい時代を切り拓く子供を育てるには」という演題でお話をされました。先生は文部科学省中央教育審議会委員もされていて、様々な観点からのお話がありました。特に、次の二つが印象に残りました。

一つ目は、「できるだけ自分で判断をさせる」というお話でした。

私にも経験がありますが、子供に失敗をさせたくないという思いから、親がいろいろと先回りをして、子供の代わりに全部判断してしまうといったことがあります。

判断するためにはいろいろなことを考えなくてははいけません。自分が判断したからには結果に対する責任も生じます。

子供なので時には判断を間違えてしまうこともあるでしょう。しかし、自分が下した判断だからこそ、その結果からいろいろなことが学べるのだと思います。失敗からは反省が生まれます。反省は、次の正しい判断につながっていくはずです。

親が全ての判断をした場合、確かに子供は失敗して辛い思いをすることがなくなるかもしれませんが、将来、「人任せ」、「親任せ」、さらには「指示待ち人間」になってしまわないかが心配です。安全や命に関わることなど、失敗が許されないものもあります。その場の状況をよく見て、子供に確かな判断力をつける経験を積み重ねていけたらと思います。

二つ目は、「できるだけいろいろな経験をさせる」というお話でした。

10年ほど前になりますが、『他人を見下す若者たち』（速水敏彦・講談社現代新書）という本が出されました。著書は、近頃の若者は、どうして自分はさしたる努力もしていないのに容易に他者を見下すのかという疑問から始まっています。人は誰でも自分をだめな人間だとは思いたくありません。一方で、本当に自信がもてるような経験や努力をしているとは限りません。その結果、他者を自分より下の存在（大したことはない、やれば自分だってできる）として見ることで相対的に自分の価値を高め、心の安定を保っているのではないかと著者は推測しています。

ここで大事になってくるのが、適切に「自己有用感」がもてているということです。自己有用感とは、「自分には、こういうよいところがある」と思えることです。

体験は、ここで重要な役目を果たします。いろいろなことに体験的に取り組むことで、自分の得意なことはもちろんのこと、苦手なことも実感することと思います。しかし、両方を分かった上で自分のよさを感じられることが、まさしく適切に自己有用感がもてている状態なのだと思います。頑張ったのに失敗してしまったという経験をもつ人は、安易に他人を「あいつはだめなやつだ」などと非難することもないでしょう。

子供自身が確かな判断力を身に付けたり、体験を通して学んだりするためには多くの時間や手間がかかります。しかし、その時間や手間を、子供の豊かな未来につながるための「心の栄養」としてとらえていければ素晴らしいのではないかと考えます。